

おおかみサラマル（心臓のない男） チリ

昔むかし、ある海辺に、三人の兄さんと妹が暮らしていました。お父さんとお母さんは早くに亡くなっていました。

兄さんたちは、毎日のように狩りに出て、獲物を取つて来ました。ただ、いつもだれかひとりは家に残つて、妹のそばにいました。兄さんたちは、妹に、海に面した窓は決して開けてはいけないよと、かたくいましめていました。妹はよくいうことを聞いて、けつして窓を開けませんでした。

ある日のこと、兄さんたちが、たまたま三人で出かけました。妹はひとりになると、ひとりごとをいいました。

「兄さんたちはどうして、この窓を開けてはいけないっていうのでしよう。ちょっと調べてみましよう」

妹は、海に面した窓を開けようとした。ところが、窓を開けるか開けないうちに、もう、心臓のない男が、さつと、妹をさらつていつてしましました。この心臓のない男は、おおかみサラマルとよばれています。

お昼になつて、兄さんたちが家に帰つてくると、窓が開いたままになつていました。妹のすがたはありません。

「おかみサラマルが、妹をさらつていったんだ」と、三人はさけびました。

あくる日、一番上の兄さんが、妹をさがしに行くことにしました。そして、家の前に小さな木を一本植えて、

「もし、この木が枯れたら、ぼくが死んだ合図だ。木が元気ならばくは生きている。だから、木から目を離さないようにしてほしい」といつて、馬に乗つて出かけて行きました。

兄さんは、どんどん進んでいきました。やがて、美しい草原にやつて来ました。そこには、金のたてがみと金のしつぽを持つた雄馬が、雌馬の群れを連れて草を食べていました。雄馬は、兄さんを見るやいなや、ものすごい勢いでかけてきて、馬もろとも突き倒してしまいました。

ある日、弟たちが兄さんの残していった木を見てみると、すっかり枯れていきました。

「兄さんは、死んだんだ」

ふたりは悲しみにくれました。けれども、一番目の兄さんがいいました。

「明日はぼくが出かけよう」

二番目の兄さんも、家の前に木を植えて、馬に乗つて旅立ちました。そして、すぐに上の兄さんの足跡を見つけて、そのあとをたどつていきました。美しい草原まで来ると、金のたてがみと

金のしっぽの雄馬がかけてきて、兄さんを突き倒しました。

二番目の兄さんの木も枯れました。弟は、

「ああ、ぼくはひとりになつてしまつた」といつて、つぎの日、兄さんたちのあとを追つて出かけました。

美しい草原まで来ると、金のたてがみと金のしっぽの雄馬が、弟めがけて走つて来ました。弟は腕のよい獵師りょうしだったので、鉄砲てつぱうで一発、雄馬を倒しました。弟は、雄馬の金のたてがみを切り取つて、自分のくらに結びつけました。そして、兄さんたちを土に葬ほうむつてから、先へと進んでいきました。

どんどん進んでいくと、動物たちの大きな群れに会いました。そこには、ライオンや、とら、ぞう、そのほかあらゆる動物がいました。弟は、

「これは、どうも、無事ににげきることはできそうにないな」と思いました。けれども、動物たちのそばを通りすぎても、何も起こりませんでした。ほつとしていると、後ろから、わしが一羽飛んできて、弟に追いついていました。

「ねえ、聞いてくださいよ。わたしたちの獲物を、みんなにうまく分配ぶんばいしてもらえませんか。あなたにお願いするように、王さまから使わされてきたんですよ」

弟がもどつてみると、動物たちが死んだ獲物をとり囲んでいました。王さまのライオンが、弟に、

「この獲物を、みんなが納得するようにうまく分配してくれないか」といました。弟は、刀で獲物を切り分けました。ライオンには好物の胸肉こうぶつを分けてやり、あとは、それぞれの体の大きさに合わせて、切り分けました。最後に頭が残りました。まだ何ももらっていないのがだれかと探さがすと、足元にありがとうございました。弟は脳のうみそをありに分けてやりました。

「みんな納得したかい」と弟がきくと、ライオンが、

「とてもよかつた。どうもありがとうございました」とお礼をいいました。

「じゃあ、さよなら」と、弟はいうと、馬にまたがつて先へ進んでいきました。  
しばらく行くと、後ろから、きつねが追いかけてきていました。

「どうぞ、もう一度おもどりください」

弟は、

（さては、お腹なかがいっぱいにならなかつたんだな。今度はぼくをとつて食うつもりなんだ）と思いました。

無理むりやり連れもどされて、弟は、

「何か御用ですか、王さま」とききました。ライオンはいました。

「あなたをそのまま行かせるなんて、わしは、恩知らずでした。さあ、馬から下りてください。あなたに、ふしぎなまほうの力をさしあげましよう。それは、あなたがどんな動物にでも変身できる力です」

弟が馬から下りると、ライオンは、

「手を出してください」といいました。そして、動物たちが順番に、弟の手につばをはきかけました。

「きあ、これで、『神さま、ライオンに』ととなえれば、あなたはライオンになります。わしにでも、ありにでも、なんにでもなれます」と、ライオンはいいました。

弟は、すっかり満足して、旅をつづけました。深い森をいくつも通りぬけ、緑の谷を進んでいくと、高い山がつらなっていました。とても越えられそうにありません。弟は、馬のくらをはずしました。馬が草原にかけて行つてしまふと、弟はとなえました。

「神さま、わしに！」

たちまち、弟はわしになつて飛びあがりました。山のてっぺんまで来ると、遠くに、きらきら光る宮殿が見えました。弟は、はるかに宮殿めざして降りていきました。そして、宮殿の中庭に着くと、そこの木にとりました。

しばらくすると、部屋の中から妹が出て来ました。

「ありがたい！妹はここにいたんだ！」

すると、妹が、わしに気づいていいました。

「あら、わしさん。どの風があなたをここまでつれてきたの。ここには蚊<sup>か</sup>いっぴきだつて来ないのに。さあ、おりていらっしやい！」

わしは木から飛びおりて、人間のすがたにもどりました。ふたりは、手を取りあつて喜びました。妹は、いました。

「わたしは、おおかみサラマルにさらわれてここまで来てしまつたの。あいつが帰つてきたら、人間のにおいをかぎつけるわ。兄さんはどこにかくれたらいいかしら」

「ぼくは、ありになつて、おまえの髪<sup>かみ</sup>の中にかくれよう。おまえは、おおかみサラマルに、どうやつたらやつが死ぬのか聞き出しておくれ」

「わかつたわ。やつてみましよう。でも、あいつは、きっと、何か変だと気づくわ」

そのとき、とつぜん、あらしのような「ろろろ」という音が近づいてきました。

「さあ、あいつが帰つてきたわ」

弟は、ありになつて妹の髪の毛の間にかくれました。

そこへ、おおかみサラマルが帰つてきました。

「おい、人間のにおいがするぞ」

「まあ、ここには、蚊いっぽいだつてやつて来れないのに。おかしなことを考へるのね」と、妹はいいました。そして、

「わたし、あなたが敵と戦うとき、せいいっぽいお手伝いしたいの。だから、あなたの心臓がどこにあるかを知つておきたいわ」といいました。サラマルは、うれしそうにこういいました。

「それじやあ、教えてやろう。草原の向こうの池に、いっぽきのとらがすんでいるんだ。そのとらの中にライオンがかくれているのさ。そのライオンの中にきつねがいて、きつねの中にハトがいる。ハトの中にたまごがひとつあつて、そのたまごがおれの心臓なのさ」

つぎの朝、サラマルが出かけると、弟は妹の髪の中から出てきて、別れをつげて出かけました。草原を歩いて行くと、そのむこうに池があるのが見えました。弟は、お百姓の家に行つて、「仕事をさがしてゐるんです。何かぼくにできる」とはりませんか」とたのみました。お百姓は、「おまえさんを羊飼いにやとうことにしよう。じつは、向こうの池から、とらがいっぽきやつて来ては羊を食つてしまうんだ。羊がとらに食われないように、気をつけてくれたら、年に銀貨を一枚やるよ」といいました。

「まかせてください」

弟は、仕事を引き受けると、すぐに羊の群れを池のほうへつれていきました。すると、すかさず、とらが飛び出して来ました。弟は、

「神さま、あのとらよりもっと強いとらに！」とさけびました。二匹のとらは戦い始めました。やがて、池のとらが、

「今日はもうやめにして、あしたまた戦おうじやないか」といいました。  
「今日の仕事を明日までのばすな」

弟はそうさけぶと、池のとらをやつつけてしましました。すると、とらのお腹をやぶつて、ライオンがとび出しました。ライオンは、池に向かつて逃げだしました。弟は、

「神さま、もっと強いライオンに！」とさけんで、追いかけていき、池のライオンをやつつけてしまいました。すると、池のライオンのお腹をやぶつて、きつねが飛び出しました。きつねも、池に向かつて逃げだしたので、弟は、

「神さま、この世で一番足の速いグレーハウンドに！」とさけびました。そして、きつねに追いつくと、かみころしてしまいました。すると、きつねのお腹をやぶつて、ハトが飛び出しました。  
「神さま、この世で一番速く飛ぶたかに！」

弟はたかになると、ハトを追いかけ、池の向こう岸まで追いつめました。すると、ハトは、たまごをひとつ、ぱとりと生み落としました。たかは、たまごをひよいと空中で受けとめて、下りて

きました。

弟は、お百姓に羊の群れを返しました。

「これでもう、池からとらが出てくることはありませんよ」

お百姓は喜んで、弟に約束の銀貨を一枚わたしました。

弟は、サラマルの宮殿にもどりました。サラマルは、ベッドの中でぐつたりしていました。そして、弟の手にたまごを見ると、

「おれの心臓を返してくれ」といました。弟がたまごをさしだすと、サラマルは、「たまごをおれの口に入れてくれ」といました。弟は、サラマルのそばに行って、たまごをサラマルのひたいにぶつけました。たまごが割れると、サラマルは死んでしまいました。

こうして、弟は、妹を救い出し、サラマルの宝物たからものを手にいれて幸せに暮らしました。

さあ、これで話はおしまい。風が話を運んでいくよ。

村上郁再話

資料『世界の民話11アメリカ大陸1』中村志郎・青山隆夫訳／ぎょうせい